ているようだ。

このように3・11後には、宗教者でなくとも、利他的行動、祈り、絆・縁、〈いのち〉の重要性を再認識するに至った人々がいる。彼らは、広い意味での宗教性、スピリチュアリティに知らずとも接近している。

3・11後、二年を経過したが、日本の宗教に起こっている事柄、また日本人の心の奥深くで起こっている事柄の意義を、海外の事例も踏まえながら振り返るのにはよい時期かもしれない。南海トラフ三連動地震、環太平洋地域における地震活動の活発化、アジアの経済成長と都市化による人口の増大、原発の拡散など、望ましいことではないが、今回学んできたことを未来の「災後」の備えに生かすことは、この時代に生きる我々の責務である。

展望は明るくないかもしれない。だが、大きな悲しみと、きわめて困難な課題に直面してなお、新たな可能性を探そうとする姿勢が3・11後の基調をなしてきた。この特集が「3・11後を拓く」と題されているのは、そのような意味を込めたものだ。

（文責　『現代宗教２０１３』編集委員会）

座談会

原発と宗教
―新しい生き方を目指して

島薗 進（しまぞの すすむ）
大澤真幸（おおさわ まさち）
渡邊 太（わたなべ ふとし）
［司会］堀江宗正（ほりえ のりちか）

一　3・11以後、原発問題をどう考えてきたか

堀江　今日はお集まりいただきましてありがとうございます。本日（二〇一二年一〇月三〇日）の座談会は、私が司会をつとめさせていただきます。皆さんは引き出しがとてもたくさんある方なので、色々な話題でお話いただけるとは思うのですが、今回は『現代宗教』の座談会ということで、「原発と宗教」、この二つに焦点をあわせて話していただければと思っております。今日の話者であるお三方は、それぞれ皆宗教に関心がある方で、かつ社会学者でいらっしゃいます。そして、三人とも原発問題に関して非常に関心がおありです。さらに共通しているのは、かなりマクロな宗教論とか、文明論とか社会論についても、お話し下さることができるということで、実際に著作などもお書きになられています。

そこで、まず最初に、3・11から約二年が経とうとしているわけですけれども、二年という時間の経過のなかで、原発問題についてどういうことを考えてこられたのかということを、ご自身で総括していただきたいと思います。また、これまでのご発言等に対して、既に色々な反応が返ってきていると思うんです。そういった反応も含めて紹介してくださったらと思います。

最初に、島薗先生は毎日ツイッターなどを通して盛んに発言されているわけですが（笑）、今までのご自分の原発に関する思考と発言について総括していただけたらと思いますがいかがでしょうか。

科学技術文明への宗教からの問いかけ

島薗　原発問題に関しては、私はまずは科学者が信頼性を失ってきたということにこだわってきています。市民が求めている適切な情報が得られないという状況ですね。福島原発事故以前に安全神話が振り撒かれており、文科省の放射線教育などはとんでもない内容だったわけですけれども、そういう原発以前のことに加えて、事故後に放射線の健康影響に関して、非常に危うい発言が繰り返されているように見受けられます。それに対して、相当数の市民が納得できずに不信感を持って、権威あるとされる科学者、あるいは学術界に大いに疑問を持っています。そういうこと自身が、世界のあるいは日本の文明の転換点というものを意味することではないかと思います。これは新しい民主革命が起こってるんだ、という捉え方をする人もいるのですけれど、そのような観点から考えています。

その場合に、科学技術文明に対する問いかけ、科学者の権威、専門家の権威のゆらぎということが、科学技術文明そのものへの問いかけと結び付いていて、そこに宗教的なものが関わってくるのではないかと思います。実際、宗教集団がその問いかけに積極的に関わってきています。これは日本でもそういう傾向があるし、ドイツやイタリアのような国で脱原発へと舵が大きく切られた際に、宗教界が社会に対して一定の影響力を持って――むしろそれを失っていくんだというのが世俗化という理論だったわけですけれども――新たに公共空間で宗教が顕在化してくるという流れがあるのではないでしょうか。この二つ、今述べました科学技術文明に対する問い直しと、公共宗教というものの顕在化、これは私自身が長らく関心を持ってきたことで、そういう意味では、私にとっては、自分がこれまで論じてきたことを集約的に考え直す機会になっていますね。

堀江　それに対する周囲の反響や反応はどのようなものだったのでしょうか。

島薗　これまでとは違う方たちとたくさん接してお話しをしました。それは対立する立場の方とやりとりしてということもありますが、たとえば科学史、科学技術社会論を専攻する方たちとの交流も増えてきています。ある

島薗　進氏

いは子供の健康を気遣う女性たちとか、あるいは農業に関わっている方たちとか、意外な方たちと実は深いところで共有する問題意識があったんだということを感じています。

堀江　そのような人たちとのやりとりの中で生まれてくる色々な思考が、新しい文明をデザインすることに繋がっていくんじゃないか、ということでしょうか。

島薗　希望としてはそういう形ですね。

堀江　そういった話を大澤先生も問題意識としてお持ちになっていると思うんですけれど、ご著書の『夢よりも深い覚醒へ』[1]や、その他色々な文章を色々な場所で発表されていますけれど、同様に今までの発言を総括していただいて、またその反応とか反論などについてもお話しいただければと思います。

大澤　僕は、事故が終わった後にいくつか喋ったり書いたりしたけれど、『夢よりも深い覚醒へ』という本は、ある意味、ほとんどもう宗教論なんですよね。だから、宗教の観点から原発問題というか3・11を考える、みたいな本です。僕は思ったんですね。あの事件は我々も含めてすべての人、特に日本人にとっては非常にショックだった。そのショックの大きさというのは、みんな上手く言葉にはできないんだけれども、明日から電気代が高くなって大変なことになるな、というようなショックではないんですよね。もっと別のショックです。そのショックにきっちり言葉を与えて、それに対応するっていうことになると、宗教の比喩が必要だ、と。僕は信仰を持っているわけじゃないのだけれど、でも宗教はものを考えるためにすごく重要な資源になっています。原発事故のショックは、宗教的な衝撃に似ている。だから、宗教のように考えるしかない、と思ったんですね。

直接原発について書いた本じゃないんだけど、去年（二〇一一年）僕が橋爪大三郎さんと対談して出した『ふしぎなキリスト教』[2]という本は非常に多くの方々に読んでもらえました。その一因には、この事故があったと僕は思ってます。あの本の対談自体は3・11の前になされていますが、出版されたのは事故から二ヶ月余り経ったときでした。この本がたいへんよく売れたということは、多くの人が3・11が起きたときに、この問題について、

なんというか宗教的にしか対応できないという、そういう感覚を持ったことが関係しているような気がするんですね。そのため、事故の後、仏教の方もそうかもしれないけれども、キリスト教について知りたいという欲求がすごく高まったと思うんですね。だからあの本が多くの読者を獲得したということ自体が、半分ぐらいは、3・11のせいだという側面もあって、やっぱりそういう意味で人々が、普段から信仰をもっている人だけではなく、

大澤真幸氏

信仰をもっていない人も含めて、なにか、これは「神」に関係するように考えるしかないという状況だったのではないかと思います。

原発は一神教か

大澤　原子力に対する我々の関わり方っていうか、原子力へのアタッチメントは、やっぱりよく考えてみると、神への帰依の仕方と非常に似ていたというふうに思うんですね。中沢新一さんが「原子力発電所は一神教だ」って言っているときの意味とはちょっと違う意味でぼくは考えていますが、いずれにせよ、原子力関連のテクノロジーに対する近代社会、特に日本社会の関わり方は、やっぱりただの便利なツールということを超えていて、信仰に近いものを持っていたと思います。その「信仰」に類するものも、ある時期からかなり「世俗化」するんだけれど、でも世俗化された形態も含めて、実は宗教的なスタイルというのは残るんですよね。原発は世俗的なテクノロジーなんだけれど、それに対する日本人の関わり方、あるいはもっと一般化して、核にかかわるテクノ